

論文審査の要旨 (甲)

申請者領域・分野 氏名	病態制御科学領域 呼吸病態内科学教育研究分野 氏名 田辺 千織
指導教授氏名	田坂定智
論文審査担当者	主 査 掛田伸吾 副 査 浅野クリスナ 副 査 高橋識志
<p>(論文題目) Morphological features of bronchiectasis in patients with non-tuberculous mycobacteriosis and interstitial pneumonia (非結核性抗酸菌症および間質性肺炎における気管支拡張の形態学的特徴)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>肺気管支拡張症は、小・中型気管支の不可逆的かつ病的な拡張を特徴とする進行性呼吸器疾患であり、その高い罹患率と死亡率により世界中で問題視されている。本邦における主な気管支拡張症の成因には慢性下気道感染と間質性肺炎があるが、それぞれで機序と病理像は異なる。本研究では気管支拡張症の形態学的な特徴を明らかにすることを目的に、慢性下気道感染症である肺非結核性抗酸菌症 (non-tuberculous mycobacteriosis: NTM) 14 例と間質性肺炎 (interstitial pneumonia: IP) 13 例を対象に HRCT での画像所見を比較検討した。結果を以下に記す。</p> <p>1) IP では気管支遠位部に向い外径および内径は直線的に減少、一方、NTM では遠位部のほうが大きい例が存在するなど外径と内径には各分岐間で変動がみられた。</p> <p>2) 第 4-8 次分岐の気管支内径、外径、気管支面積に占める壁面積の割合 (WA%) と気管支平均径に対する壁厚の割合 (T/D ratio) は、外・内径での結果とは逆に、NTM では各分岐間で大きな変動がなく直線的な変化であった。一方、IP では分岐間の変動が大きかった。</p> <p>3) 測定値の変動が大きかった第 6・7 次分岐については、変動係数を算出した。外径の変動係数は NTM で大きかったが、内径の変動係数には両群間で顕著な差を認めなかった。また、WA% と T/D ratio に関しては、IP で変動係数が大きかった一方、NTM では変動係数が比較的小さかった。</p> <p>結果より、NTM では感染に伴う気管支拡張や気道壁の浮腫、IP では周囲組織からの牽引による変化が推定される。本論文は、各疾患により気管支拡張の形態が異なることを非侵襲的な手法である CT 検査を用いて初めて証明した研究であり、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	BMC Res Notes に掲載